

若手医師・歯科医師から、平和への希求

## 「戦争をしないから大丈夫」と 言える日本に

●医師（前橋協立病院）

瀧口 由希 たきぐち ゆき



私が初めて平和について意識したのはいつの頃だったろう。まだ小学校に上がる前の記憶がある。戦争について描かれた絵本を親から読んでもらい、空を飛んでいる飛行機（普通の旅客機）が怖くなったことがあった。そのことを親に話すと、「心配しなくても大丈夫。日本は今戦争をしていないから。これから先もずっと、日本は戦争をしないと誓ったんだよ」と言われ、心から安堵したのを覚えている。

日本国憲法第9条の存在を知ったのは、それからもう少し後のことだ。小学校の図書室にあった「日本国憲法」というタイトルの本は、子どもにも読みやすいよう漢字に平仮名がふってあった。難しい箇所もあったけれど、当時の私は9条の条文を読んで胸のドキドキが止まらなかった。「戦争のない時代の日本に生まれて良かった!」と、嬉しくて仕方なかった。

医師を志し入学した医学部は、被爆地長崎にある大学だった。被爆者の方々と出会い、月日が経過しても原爆によって受けた傷はまったく癒えていないことを知った。被爆国である日本は核兵器廃絶の取り組みに関して、世界の先頭に立つことが求められていると感

じた。広島で軍医として働き、自身も被爆され医療活動を行っていた肥田舜太郎先生のお話を伺ったことがある。「怪我をした兵士の治療にあたっていたが、傷が完治すると再び戦場へ戻っていく兵士たちを見て、『いのちを守るために医師になったのに……』と、人殺しの手助けをしている実情に大きな自己矛盾を抱えていた」と仰っていた。戦争中は「健康」の概念さえも歪んでしまうこと、また平和でなければ医療はそもそも成り立たないのだと強く思った。

一昨年、出産をして子どもを取り巻く社会の動きについて自分自身の問題として捉えるようになった。特に昨年閣議決定された「集団的自衛権の行使容認」については、日本が再び戦争をする国へと逆戻りしているように感じ恐怖を覚える。現在1歳7カ月の娘が大きくなったとき、「日本は戦争をしないから心配しなくて大丈夫」と言えるような国にしたい。どんな理由があろうとも正しい戦争は存在しないこと、殺されてもよいのちなんてないことを娘には伝えたい。いのちを育む母親の一人として、また日々多くのいのちと向き合う医師として、思考停止に陥ることなく行動していきたいと考えている。